

キン肉マン — ヴィトレイの裏切りの箱と不和の神 —

天井一筋300年

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

王位争奪編開始直後の裏側。

役職のためにキン肉マンから離れたテリーマン、ロビンマスク、ブロッケンJr. 達正義超人。

正義超人入りしたバッファローマンさえもキン肉マンの前にその姿を直ぐには見せなかった。

友情に熱い彼らが役職を理由にキン肉マンに力を貸さないと
その不可思議な原因こそ……!?

そこには邪悪五大神とは別に暗躍し、かの天上兄弟喧嘩の黒幕となつた神がいた!?

目次

ヴェイトレイの裏切りの箱！	1
ヘッドギア！	5
カピラリアの闇！	9
南極の守護者！	13

ヴィトレイの裏切りの箱！

天上兄弟喧嘩という大昔の超人の神についての伝説がある。

兄である金のマスク超人ゴールドマン

弟である銀のマスク超人シルバーマン

彼等は仲の良い兄弟の超人であり、それぞれゴールドマンは戦、シルバーマンは平和を司る神であり、攻撃と守り、矛と盾。

二人は対をなす超人だった。

しかし、そんな二人の間に走る亀裂。

一人の子供の他愛もない一言、二人が戦えばどちらが強いのかと言うその問いにより、ゴールドマンとシルバーマンはそれぞれの強みを主張しあい、いつしか仲違いの末に後に伝わる『天上兄弟喧嘩』が始まったのだ。

それらは後世の超人に伝えられた逸話であり真実かどうかは分からない。

真実はこの喧嘩を調停した裁きの神ジャステイスに聴けば良いだろう。

だが、この天上兄弟喧嘩には根本的な原因と要因を招いた裏の存在があった。

その名は105の超人の神よりはぐれし神の石柱である『不和の神』と彼の神器『ヴィトレイの裏切りの箱と呪いの人形』である。

1.

いつぞやの8月26日号の肉刊スポーツの見出しを御存知だろうか。

そう、アシユラマン婚約!?!の一行である。

これは実はアシユラマンが後に妻となるイボンヌとの逢い引きを偶然見かけた魔界超人特派員のかつてな思い込みから付けられた見出しなのだが、実のところ当たらずとも遠からず、アシユラマンの浮いた話の一つとなっている。

その逢い引きだが、二人が何をしていたか……。

「イボンヌ……私は悪魔超人だが、いずれは正義超人や完璧超人達と

の和解に臨みたいと考えている」

アシユラマンは三対六本の腕の内中段の対の手に一つの不気味な箱を持ち、魔界由来の女性超人と共に魔界の奥底に向かっていった。

完璧超人に狩られた笑い冷血怒りの面は既に正義超人キン肉マンの手によつて彼のもとに返されてはいるが現在の彼は素顔のそれであつた。

嘆きの顔ではあるが、実のところその優しい顔はむしろ慈愛と言つても良いかも知れない。

現状のアシユラマンに悪行超人の面影はない。

「二つの区切りとして、あのタッググトーナメントで用いたこの呪われた箱と人形を魔界の奥底に封印したい」

正義超人の友情を奪いキン肉マンを孤立させることに成功した呪いの人形とそれらを封じ込めるヴィクトレイの裏切りの箱と呼ばれる魔界に伝わる神器である。

アシユラマンがイボンヌと共に魔界に訪れていたこの場面を肉刊スポーツの記者が目撃し後々アシユラマンへと突撃インタビューを行ったのである。

その際アシユラマンはサタンクロスとの試合を控えておりいい迷惑となつたことは8月26日号の記事からも明らかであろう。

「それに今、新たな危機がキン肉マンに迫っているかも知れない。このヴィクトレイの裏切りの箱が私の意思とは関係無く、再び作動し次なる呪いの人形を生み出しているのだ」

裏切りの箱をパカリと開くやそこにはキン肉マン、テリーマン、ロビンマスク、バッファローマン、ウルフマン、ブロッケンJr.の人形が納められていた。

「しかも、これは私の不注意でだが、いつの間にか作られていた人形に驚きヴィクトレイの裏切りの箱を落としてしまい……そのときにウルフマン人形の脚が傷付いてしまったのだ……!」

イボンヌはアシユラマンのその告白に何と返して良いものかわからずなんとも言えぬ表情のまま顔を背けるしか無かつた。

「不思議だとは思わんか。いくら役職が有るとはいえテリーマンやロ

ビンマスク、ブロッケンが王位を賭けたキン肉マンに協力しようとしていないのだ。それは恐らく……このヴィトレイの裏切りの箱が影響している」

ウルフマンの脚が治らないのも私のせいかも知れないとアシユラマンは心の内にて呟く。

「これらを封印することこそ、私の悪魔としての区切りであり、今、キン肉マンを救うことになる……私は考えたのだ」

「なるほど面白い。流星は魔界のプリンス、アシユラマン」

イボンヌと共に魔界の奥底へと続くトンネルを進むアシユラマンの背後より男の声が響く。

何者かが後を追ってきているなどとんと気付けてはいなかった。

その異常性にアシユラマンは眉を潜めイボンヌを庇うように下がらせた。

「何者だ」

「知性、残虐、技巧、飛翔、強力を含む105の神よりはぐれし邪悪神。その名も不和の神」

「っ！貴様も超人の神か!？」

闇より生じた白いフードの男がアシユラマンの6つの目に映る。

しかし、キン肉マンの戴冠式に現れた超人の神達からは実体の様なものは見受けられなかった。

頭部のような物は浮いてはいたが、投影された幻の様な存在感しかそこには無かったはずだ。

だが、この神を名乗る男からははつきりと実体を伴った肉の圧力が感じられるのだ。

「尤も……こうして肉体を持った以上超人の神とは言えぬかも知れんがな」

くくつとくぐもった笑い声とともにアシユラマンの耳には半端にしか届かぬ言葉を発する。

「そのヴィトレイの裏切りの箱は元々この私の物でな。現時点、超人界を乱さんとする邪悪五大神の役に立つだろう事は明白。返して貰うぞ」

その言葉が号令となったのか。

不和の神のローブより闇が伸びる。

そして箱を守ろうとするアシユラマンの隙を衝くかのように新たな闇が二つ伸びイボンヌへと襲いかかる。

咄嗟にヴィトレイの裏切りの箱への意識がそれイボンヌを庇うアシユラマン。

しかし、それを狙い更なる影が二つローブより飛び出し、イボンヌへと意識が集中してしまったアシユラマンの手より裏切りの箱を奪い取る。

「しまったー！」

五つの影は再び不和の神の元へと飛び、恭しくそれを手渡した。

影達も同じ様なローブを羽織った男達であり恐らく超人であろうとアシユラマンは察し、戦闘体制を取るためか何処からか笑い、冷血、怒りの三面を取り出し装着する。

「けけけー」

闇の一人がローブを脱ぎ捨てる。

そこに居たのは、古代の日本の鎧。

いや、甲冑を纏った人間を粘土や泥で形作り模した人形。

埴輪の超人だった。

「さて、ハニワマン。ここでやりあう必要もない。私の目的はこいつを返して貰う事だけだ。アシユラマンと試合うつもりなど毛頭ない」

そして不和の神はヴィトレイの裏切りの箱を開き、キン肉マン、テリマン、ロビンマスク、バッファローマン、ブロッケンJr. を模した呪いの人形をハニワマンを筆頭にそれぞれ闇のローブを纏った超人に投げ渡し、自身はウルフマンの人形に一度目をやるがそれに関しては何も述べず、蓋を閉め、自らはヴィトレイの裏切りの箱を脇に抱える。

「ククク、これで奴等の友情は引き離された。キン肉マンはこれより、たった一人で王位争奪戦に挑まなければならぬ」

そして、突然アシユラマンの背後に現れた時と同様にして不和の神はその姿を消していった。

ヘツドギア！

中国河南省

草一つ生えない荒涼とした岩山がそこにあった。

もしもそこで足を踏み外そう物なら決して助かるとは思えぬ切り立った崖。

崖道を向かった先に有るのは赤い門構えである。

その門を越えても続くのは剥き出しの岩肌のみ。

家は見当たらない。

だが、そこに一人の男がいる。

崖の上で中国拳法の演武を続ける辮髪の男は超人レスラーに明るい者なら誰もが見覚えのある超人であろう。

中国四千年の伝統ラーメンマンである。

先の宇宙超人タッグトーナメントで身に付けていた隈取り模様の覆面、モンゴルマンマスクは装着しておらず、超人オリンピックピック ザ ビッグファイトなどで親しまれたラーメンマンそのままの姿であった。

超人オリンピックピック ザ ビッグファイトの準決勝にてウォーズマンから受けた傷が原因で一時は植物超人となつてはいたが現在は幾分か回復し、モンゴルマンマスクを身に付けずともこうして日課である演武を舞う程度の事ならば可能となつていた。

しかし、やはり実際の試合となればどうであろう。

霊命木と呼ばれる特殊な樹木からモンゴルマンマスクを作りラーメンマンに再び戦う力を取り戻させた超人専門の名医ドクターボンベにかつて随伴した事がある中国出身の残虐超人ゴクウマンはその演武を眺めながらふとそう考えていた。

モンゴルマンマスクはヘルミツシヨネルズとの死闘により機能を停止する程ではないが戦闘用に使える状態には無いほどにズタズタになつている。

今後ラーメンマンはリングに上がる事になつたとしてもモンゴルマンマスクを被り、古傷により低下している身体能力を補う事は難し

いだろう。

しかし、そんなラーメンマンに対してであったとしても、どうしても伝えなければならぬ事があるのだ。

ゴクウマンがここを訪れたのには訳がある。

「久し振りだな、ラーメンマン」

軽く手を上げたゴクウマンへと、演武を終えたラーメンマンが視線を向ける。

「珍しいな、中国へ戻っていたのか。ゴクウマン」

「ああ、お前に……教えておきたい事があつてな」

宇宙超人タッグトーナメント終了後、様々な功績を讃えられたキン肉マンがいよいよキン肉星の王位を継ぎ第58代キン肉星大王となる戴冠式、その当日。

新たな悪行超人である五人の運命の王子達が現れ、彼らはキン肉マンこそ偽の王子であると主張しキン肉星の王位を賭けキン肉マンへと挑戦状を叩き付けたのだ。

それをラーメンマンに伝える事こそゴクウマンがここ中国に戻ってきた理由であった。

「なんと……そんなことが……」

「しかも、だ。これを見てくれ」

ゴクウマンが取り出したのは週刊HEROと言う超人に関する事柄専門の情報誌だ。

テリーマンの恋人の翔野ナツコが記者を勤めている雑誌と言うことでアイドル超人の間でよく知られる雑誌であった。

「キン肉マンを含めた六人の運命の王子が団体戦……。何だ?! キン肉マンチームは先鋒キン肉マン、大将ミートのたった二人で、五人一組のチームを相手にするのか……!?!」

週刊HEROには戴冠式に起きた異変の後に開始される事が決まった王位争奪戦について、細かく、それぞれのチーム、そしてそのチームメイトについて書かれていた。

「テリーやロビンはそれぞれ正義超人軍参謀、正義超人軍幕僚長としての立場から中立でなければいけない為に、この戦いへの参加は不可

能らしい」

「ウルフマンやジェロニモは」

「ウルフマンは痛めた足の療養をするためにハワイへ向かった。ジェロニモはその付き添いの後、向こうでジェシー・メイビアとの試合が決まりそれに備えている大事な時期だ。ブロッケンに関しては分らんがドイツへ戻っている様だな」

ウォーズマンは先日の宇宙超人タッグトーナメントでヘルミツシヨネルズとの試合により命を落としている。

「すまん、ゴクウマン。よく知らせてくれた」

「お前はどうかする？」

「私の古傷はまだ癒えてはいない。モンゴルマンマスクも戦闘に使えるほどの機能はもはや無いだろう」

「……やはり、そうか。伝えるべきでは無かったかも知れないが、お前にとって何も知らないまま全てが終わってしまったのもどうかと思つてな」

「……いや、私がリングへ再び上がる可能性を賭けた希望がまだあるのだ」

ラーメンマンはそう語り青々とした空を見上げた。

その言葉に偽りは無い。

「霊命木で作ったモンゴルマンマスクに改良を重ね、完成させたのがこのヘッドギアだ」

懐より小さな保護具を取り出し、それをゴクウマンに見せる。

ゴクウマンの目にもそれは傷口だけを覆うことで覆面のように視界を遮られる事もなくなり、より自由に戦える品物だと見受けられた。

「しかし、ラーメンマン、元々お前はモンゴルマンマスクを被ることで霊命木から発せられる特殊なガスを吸い、戦えるようになったはずだ。霊命木のガスを吸える訳ではないヘッドギアで大丈夫なのか

……？」

「……」

「どうした？」

ゴクウマンの問い掛けにラーメンマンは無言を貫き、そして……
「詰まらん事を聞くな。男なら無意味な疑問など抱かず有りのままを受け入れるのだ。男は黙って残酷拉麺」

そのラーメンマンの答えに今度はゴクウマンが無言になってしま
う。

「こ、言葉の意味がよく分からんが……」

「フツ、まあよい。ドクターボンベとお前がガンダラーで手に入れてくれた秘薬と霊命木を以てしてモンゴルマンマスクが完成した事をお前も知っているだろう?」

「ああ、当然だ」

「このヘッドギアはガンダラーの秘薬とは異なる力を扱うことで古傷を覆うだけで霊命木のガスを活かせるようになったのだ」

「な、その力とは何だ……!?!」

「嘗ての強敵、ミスター・カーメンがそれをもたらしてくれた……未知のエネルギー、ピラミッドパワーを……」

ミスター・カーメン

その男はモンゴルマン時代に戦ったナイルの悪魔の異名を持つエジプト出身の悪魔超人である。

カピラリアの闇！

銅ベルマンと言う正義超人がいる。

頭部が特徴的な超人でそれは鐘の様に見える、超人レスラーとしては珍しく盾を携え、手は杭のような形状となっているペルー出身の銅鐘の化身とされる奇妙な超人である。

身長189cm 体重450kg 超人強度55万パワー 超人硬度は凡そ3と全身が銅製故か超人として考えてもかなりの重量級であろう。

超人レスラーとしての活躍として有名なのは第20回超人オリンピックに参加した事だろう。

決勝トーナメントへの切符を勝ち取る為の最終予選である地球と月の往復マラソンにてキン肉マンに加えスフィンクスマンやルピーン、アマゾンマン達他複数名と同着。

決勝トーナメント参戦への最後の一人を決めるバトルロイヤルで惜しくも敗退したが、その試合は超人レスリングファンの間で語り草となるほどの死闘であったという。

第21回超人オリンピック ザ ビッグファイトではペルーでの国内予選大会にてヒガンテマンに敗北してしまい本選に出場する機会を失ってしまったかに見えたが、幸運な事にヒガンテマンは国内予選大会決勝にて死亡。

国内予選大会での優勝者と準優勝者が本選に進むことが出来たペルー予選では死亡したヒガンテマンに代わり、宇宙超人委員会委員長ハラボテ・マツスルの推薦もあり、超人オリンピック本選に出場が決まった。

だが残念ながらこの超人オリンピック ザ ビッグファイトでも決勝トーナメントまで進むことなく予選で脱落している。

決して目覚ましい実績を揚げてきたと言う訳ではないかも知れないが、第20回超人オリンピックでは不運に見舞われなければ決勝トーナメントに出場していた可能性もあり、そもそも10万人の超人が参加した超人オリンピック ザ ビッグファイトでは一握りの超

人のみが勝ち上がった新幹線アタックにおいても好成績を残しているのだ。

超人レスラーとしての実力は祖国ペルーに於いて間違いなく五本の指に入るはずである。

そして、彼にも正義超人として何より大切な熱い友情パワーが宿っていることは、キン肉マンが王位を賭けて争った王位争奪戦の最後の対戦相手であるキン肉マン スーパー・フェニックスとの試合にて、ネプチューンマンが発したメッセージを受け取った1000人の正義超人の一人として、キン肉マンを応援するため大阪城へと駆け付けている事からも明らかである。

そんな正義超人銅ベルマンの本業だが、実は超人レスラーではなく、超人による犯罪を調査する超人刑事である。

人を大きく超越した肉体を持っている超人が法を犯す罪人であった場合には当然人間ではどうしようもない。

そんな恐ろしい犯罪超人を取り締まるのが超人刑事や超人警察なのだ。

有名な者としては正義超人ロビンマスクの盟友であり、第19回超人オリンピックイギリス国内予選で名を馳せたジョンブルマンなどが挙げられるだろう。

銅ベルマンもまた数々の犯罪超人を取り締まり、時には撃破してきたのだ。

ペルーでのそれらの功績も宇宙超人委員会からの評価を高くしている理由の一つである。

そして現在、超人刑事としての銅ベルマンだが、彼は『ペルー超人病院カピラリア毒素治療科超人ドクター連続殺人事件』と言うペルー超人界始まって以来の凶悪事件の解決に頭を悩ませていた。

ペルー国内に止まらず、幾つかの国で同時多発的に起きていたこの殺人事件は、カピラリア毒素治療の発展を大きく滞らせる事になった超人史に残る悲惨な事件として超人や人間の間で語られる事になる。

カピラリア毒素とは遥かな太古、超人の神の裁きにより超人を絶滅させる為に照射されたカピラリア七光線に含まれる物で超人に悪影

響を与えると言われている。

王位争奪戦に知性チームの一員として参加したプリズマンが使う必殺技『レインボーシャワー』で一躍知られる事になったこの毒素であるが、当然超人の間ではカピラリア毒素は予てより危険視されており、自然界にも太古に照射された七光線の残留物が今も僅かながら存在している事から毒素を抜き取る為の医療技術が確立されている。

ラーメンマンがプリズマンとの死闘で浴びたカピラリア毒素は早急な治療を受けられたなら抜き取る事も可能とロビンマスクが発言した事から、日本にもカピラリア毒素の影響を治療できる超人病院が存在していることも知られているだろう。

この連続殺人事件が凶悪極まりない事件とされるのは、超人ドクターを殺害しただけでなくカピラリア毒素治療の資料を焼失、更には治療器具の破壊にある。

まるでカピラリア毒素治療の根絶を目的としたかのような事件なのだ。

人間の中には超人を疎ましく思う者もいる。

犯人は最悪そんな超人差別主義者の人間ではとも考えられたが超人ドクターとて超人である。

超人ドクターとして有名なドクターボンベは若かりし頃、ハンゲ・キラールのリングネームでリングに立っていた。

そこまでする無いにせよ超人ドクターもまた人間とは比べ物にならない身体能力なのであるから当然人間相手にそうそう遅れを取るとは思えない。

ならば犯人は同じ超人であろう。

しかし、それならば何故、超人が超人の天敵であるカピラリア毒素治療の根絶を目的としたような犯行をするのかが理解できないのだ。

事件は王位争奪戦の最中に起きて居るためにプリズマン並びにスーパー・フェニックスの関与も疑われて然るべきなのだが、キン肉星王位の継承権を持つスーパー・フェニックスは当然未来の超人界を担う可能性を持つ者である為に超人界全体に害を成そうとするとは思えないといった先入観や事件の起こりが日本から遠く離れたペ

ルーであったこと、試合会場がある日本のカピラリア毒素治療科は襲撃されていなかった事が彼らに疑いの目が向けられる事も無かった理由かも知れない。

しかも、いつの間にやら犯人はなりを潜め、プリズマンやスーパー・フェニックスにとつて最も重要となるラーメンマン戦の頃には、殺害事件は起こらなくなったのである。彼らが事件の中心にいるのならラーメンマン戦の前に日本のカピラリア毒素治療科を襲撃するはずだ。

銅ベルマンがキン肉マンの応援に日本へと駆け付けた理由は超人オリンピックを競った仲としての友情が一番に挙げられるのだが、日本のカピラリア毒素治療科への警備などの目的もあったのだ。

王位争奪戦も終わり、キン肉マンの勝利を見届け、ペルーに帰国し更なる調査を行う銅ベルマンだったが、この事件は犯人不明、目的不明として永遠に未解決となる。

この事件さえ無ければ今以上にカピラリア毒素治療は発達し、数年先には例えば仮に超人の神が再びカピラリア七光線を照射する事態になったとしてもその毒素を中和する医療技術が生まれていただろう。

だが確実にカピラリア毒素治療技術は衰退こそすれ、発展の希望は絶たれたのだ。

南極の守護者！

南極

この極寒の地で10万年もの間眠り続けていたと語った超人がいる。

彼の名前はクリスタルマン。

身長280cm 体重200kg 超人強度90万パワー。

全身が水晶で構成された非常に美しい超人だ。

ラツカ星の侵略を目論む宇宙野武士を相手取り、キック一発で宇宙野武士の首を刎ねた冷たいファイト、誰よりも早く彼らの弱点を暴いた洞察力、近年の超人では珍しい光線技をも扱う一流の正義超人である。

そんな正義超人としての高い実力を持ち合わせながら彼は超人オリンピックに参加することなく南極でまた眠りについていた。

その為悪魔超人や悪魔騎士の正義超人界襲撃の際にもその姿を見せる事は無かったのだが彼は再び異変を感じその目を覚ました。

最初に感じた異変は富士山麓に出現したタッグトーナメントマウンテンの存在であった。

その調査の為に彼もタッグトーナメントに参加しようと考えたがこのタッグトーナメントは宇宙超人委員会の推薦が無ければ僅か八枠のタッグチームの中から漏れてしまうのだ。

故に委員長のハラボテ・マッスルと懇意にしている超人のタッグチームばかりがその八枠に選ばれてしまった。

ビッグボンバーズのスペシャルマンとカナディアンマンは恐らくタッグトーナメントが行われる以前、キン肉マンと悪魔将軍が試合したダイヤモンドリングを委員長と共に支えたと言う功績からハラボテ・マッスルの評価が大きく上がったのだろう。

このタッグトーナメントに参加する為にクリスタルマンが選んだタッグパートナーはサボテンマンと言う過去に超人オリンピックザ ビッグファイトに出場した事もある正義超人だ。

だが、やはりハラボテ・マッスルの推薦からは漏れてしまいクリス

タルマンもサボテンマンもタッグトーナメント出場は叶わなかったのである。

その宇宙超人タッグトーナメントを観客席にて見守っていたクリスタルマンだったが、彼が感じた真の異変はそのタッグトーナメントそのものでは無かった事を知ることになる。

南極

「やはり、封印されていた欠片が失われている」

宇宙超人タッグトーナメント決勝を監視していた謎の気配を追っていたクリスタルマンはそれが故郷の南極へと消えた事にふと不安がよぎった。

彼が10万年もの間、南極で眠り続け守護していた物が存在しているのだがそれが失われていたのだ。

「いかんぞ……あれは超人界を滅ぼしかね無いものだ」と超人の神に聞かされ10万年前からその封印を守護していたのに……」

彼がその封印を守っていた物こそが近い将来キン肉マンが王位をかけて争うことになる知性チームのチームメイト、プリズマンの核となる欠片である。

「む、あいつは……」

極寒の氷の大地、そこに奇妙な出で立ちの男の姿があった。

あいにく、欠片の封印を暴き、南極に住む一人の結晶超人を生まれ変わらせた者では無い。

だが、その存在こそ、正義超人達が知らぬところで暗躍する悪行超人の一人なのだ。

その手にはクリスタルマンにも見覚えがある超人を象った人形が持たれている。

「こんなところで超人消しゴムで遊んでいるのかな？」

極寒の地で一人、ブロッケンJr.の人形を持ったその男に声をかける。

呪いの人形。

タッグトーナメントを見ていたクリスタルマンもその存在を既に知っている。

しかしあれはキン肉マン達が奪い返した筈である。

だとすると新しく何者かがまたも呪いの人形を作ったのだろうか。

「悪魔超人か？」

「ヒヒヒー、あんな下等な超人と一緒にしないで貰おうか」

フード付きの白いマントを身に付けた男は奇妙な笑い声をあげた。

「私は超人の神に仕える兵隊超人の一人よー！」

超人の神には直接彼らに仕える兵隊がいる。

超人の神に見出だされた者もいれば、超人の神に作り出された者もいる。

飛翔チームのメンバーに選ばれた兵隊超人達の異様に高い超人強度は彼等が神に見出だされ神の力を賜った超人であるからだ。

天界の神兵達。

それこそ兵隊超人である。

「超人の神……」

クリスタルマンはタッグトーナメント終了後すぐに日本をたつてはいるがキン肉マンの身に起きた戴冠式の異変を当然知っていた。

キン肉マンに力を貸してやりたいのはやまやまであったが、故郷の南極に向かった気配を探ることも正義超人としての使命だと考えたのである。

それにキン肉マンにはアイドル超人の仲間がいる。

キン肉マンの手助けに適した者は彼等であり、自分がやるべき事は南極の調査であるとクリスタルマンは考えたのだ。

「お前は邪悪五大神の手下か」

「ヒヒヒー、私の主は憤怒の神！邪悪五大神ではないわ！」

兵隊超人がマントを脱ぎ捨て、マントとブロッケンJr.の人形を上空へ放り投げる。

するとブロッケンの人形はマントにくるまり不思議なことに上空でピタリと止まった。

「憤怒の神……」

「そして私の名はユニコーンマンだー！」

フード付きのマントより姿を現したのは一見して一本の角が目立

つ超人であった。

ヘルメットのような被り物から生える額の角。

腕と脚を守るプロテクター。

攻撃も守りも両立させた容姿からも実力者であることが窺い知れる。

「それははぐれ悪魔コンビが持っていた呪いの人形だろうか？何故神の兵隊超人が手にしている」

「やかましいわー！下等超人が！」

「なに!？」

問答無用とはこの事だろうとクリスタルマンが考えるよりも早くユニコーンマンが跳んだ。

「硬度100！ダイヤモンドホーン！」

超人硬度100を誇ったダイヤモンドパワーの角。

そして、超人硬度100のプロテクター。

ダイヤモンドの角とプロテクター。

これこそ、完璧超人ケンダマンが言うところの、攻撃も守りも完璧なダイヤモンドパワーである。

クリスタルマンが迎撃のために両手を合わせ真っ直ぐ腕を伸ばし放たれるビーム。

しかし、そのビームの速度を凌駕する突進の速さ。

クリスタルマンの細い目が見開かれた。